シック　ビューティー

chic beauty

―明治の着物と装身具―

美人十二ヶ月　其七　海水浴　1898年
文化ファッション研究機構蔵

浅葱縮緬地菊芒模様振袖　明治時代19世紀
文化ファッション研究機構蔵

平成23年7月7日（木）～平成23年8月6日（土）
休館日：日曜日・祝祭日 ※入場無料

共立女子大学
神田一ツ橋キャンパス　本館1階展示室

東京都千代田区一ツ橋2-2-1　TEL03-3237-2425
・東京メトロ半蔵門線・都営地下鉄三田線・都営地下鉄新宿線
「神保町」駅下車A8出口から徒歩1分
・東京メトロ東西線「竹橋」駅下車1b出口から徒歩3分

chic beauty

シック　ビューティー

―明治の着物と装身具―

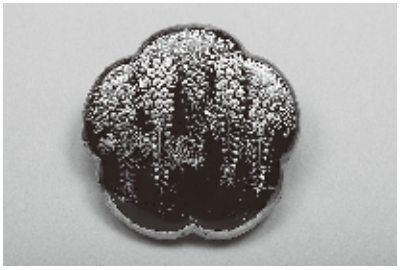
維新をもって始まった明治時代ですが、文化のすべてが政治同様いっきに変わったわけではありません。文明開化を象徴とする西洋化路線は政府によって主導されたため、身分や分野によってその実質的な普及には時間差や格差がありました。特に服飾においては、西洋化はまず公的な立場にある男性のそれから始まり、女性では、社会的身分が高く公的な場に出ることの多かった旧大名家の女性たちが、それに倣いました。

明治時代の初期においては、ほとんどの女性が江戸時代の「小袖」を受け継ぐ「着物」を着用し、その様式も江戸時代後期のそれとほとんど変わるところはありませんでした。また男性でも、いわゆる庶民に当たる人たちや子供は、江戸時代同様、着物を着ていました。

ヨーロッパからの化学染料やジャカード機、バッタン機などの導入を明治時代の染織の大きな特徴とするのが一般的ですが、化学染料が実質的に定着した明治時代の前半には、伝統的な柄を化学染料で表わした着物が多く見られます。さらに、明治時代の後半には大きな様式的転換を迎え、裾裾に模様を表わす着物では、裾や裾の部分を地味な地色から暈すように明るい色に染め分け、この部分に絵画的な模様を表わすようになります。そして明治時代末期には、日本的なモチーフを西洋的な色使いで表わすものが多くなり、特に菊牡丹などの植物を暈しを含んだ濃艶な色合いで表現した着物が流行しました。

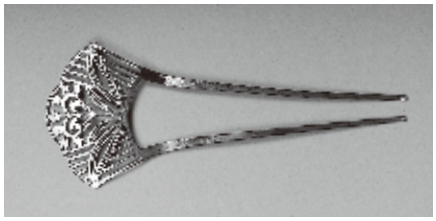
今回の展示では、変革の時代であった明治時代に、江戸時代以来の伝統を伝えていた着物が、どのような変化を遂げ、どのように新しい美を作り出していったのかをご覧いただきたいと思います。なお、本展示は、文化ファッション研究機構の服飾文化共同研究「近世・近代風俗画における服飾表現に関する分野横断的研究　―小袖及び着物の編年的研究への絵画研究の活用―」の研究成果の一部であり、作品の借用に関しても同機構の協力をいただきました。

紺木綿地花瓶花籠模様一つ身
明治時代19世紀
共立女子大学蔵



藤模様薩摩焼釦
明治時代19世紀
共立女子大学蔵

椿模様九谷焼ブローチ
明治時代19世紀
共立女子大学蔵



花模様洋簪
明治～大正時代20世紀
共立女子大学蔵

菊尽模様櫛
明治～大正時代20世紀
共立女子大学蔵